

# 中流住宅の平面構成に関する研究

第9報 南入り住宅の中廊下型住宅への発展について

正会員 〇 大津 博幸 同 青木 正夫 同 竹下 雅和  
同 磯貝 道義 同 友清 貴和 同 宮崎 信行  
同 岡 俊江 同 中園 真人 同 深野木 信  
同 永島 潮 同 秋元 一秀

## ① はじめに

本報では、座敷直入りと次の間入りの2つのアクセス型が、それぞれの発展のなかで、まったく系列の異なる中廊下型平面へ発展していく過程について詳述する。

## ② 座敷直入り系列

### 1) 座敷直入りの基本型について

図-2は、座敷直入りの基本型を示す事例である。この型は、従来の南面した続き間構成はすでになく、夕人数接客時には、日常は主寝室として使われている座敷北側の六帖を次の間として、一体的に使用される、いわば南北の転用続き間座敷と言えるものである。

第5報で述べた北入り基本型との関連でみると、南入りの座敷直入りの基本型は、夕人数接客の際の続き間の構成の仕方が異なる。すなわち、北入り基本型では、東西に南面して2室、南入りの座敷直入りの場合は、南北に2室である。しかし、いずれも座敷へ直接アクセスすることによって、続き間座敷の格式性が消失しているという点では、平面構成原理そのものは同じである。

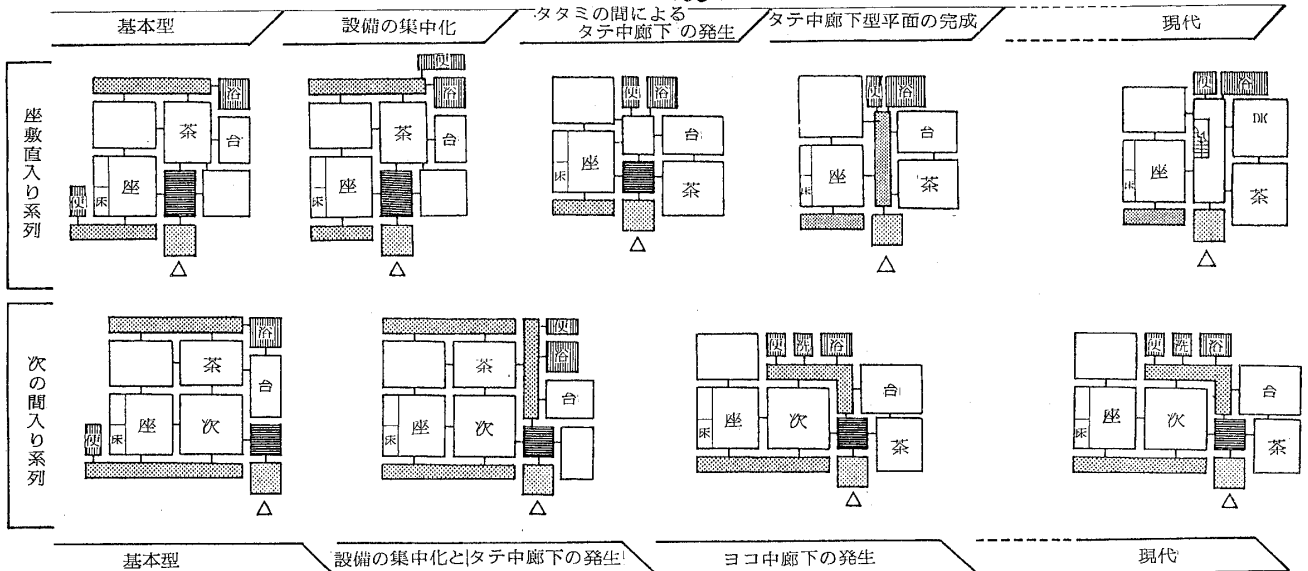
座敷直入りの基本型では、便所は座敷床の間の裏に位置し、南縁を通過していく。このため客の領域は通常、玄関と座敷の南面部に限定されている。また浴室は台所の北側にあり、便所とは分離している。一

方、玄関の間の東側に位置する半帖半は、客の通り抜けがなく、安定した居住性のよい部屋となっている。

### 2) 座敷直入りの発展過程

基本型では、便所が床の間の裏にあるため、家族の便所動線が、座敷の前の縁側を通り抜け、特に縁側の障子を開けて接客を行っている場合に問題となる。図-3は、これを解決するために、便所が台所の北部へ移動し、設備が集中化した事例である。しかしこの場合、客は座敷の北側の部屋を通り抜け、北縁を通過して便所へ行くことになる。前述したように、座敷北側の部屋は、もともと主寝室であり、家族生活空間の色彩が濃い。このような部屋を、客が通り抜けることは問題であり、このために、玄関の間の奥に2~4畳の部屋を設けて、タタミ中廊下が発生すると考えられる。(第8報 図- ) このタテ中廊下が貫通することによって、便所浴室の設備が、妻側北部から、北面中央へと移動する契機も生まれてくる。またそれと同時に、茶の間は妻側に押し出された形となり、南面した部屋と整形につながる。こうして茶の間の南面化は促進されると考えられる。一方、このタタミの間は三方を部屋に囲まれ、居住性の悪い通路であるが、その後このタタミの間は通路としての機能が純化され、図4の事例にみられるような板張りの廊下となり、タテ中廊下型平面の完成をみるに至る。たとえら

図-1 平面構成の発展モデル図



このように座敷直入り系列は南北のタテ中廊下という、北入り系列とは異なった平面構成へと発展していく。しかし、いずれも中廊下の発生によって動線を解決し、茶の間などの家族生活を充実させていくという発展段階をたどる。

ところで、第8報で北座敷の続き間構成について述べたが、図5の事例のように、タテ中廊下が通った段階でも、この構成が見受けられる。これは、格式性を持った南北の続き間がタテ中廊下によって、家族生活空間から独立した、より接客を重視した平面型である。これは、次節で述べる次の間入り系列の発展型と、平面構成の原理において同じである。

### 1) 次の間入りの基本型について

図6は、次の間入りの基本型で、座敷一次の間の南面続き間をそのまま残し、その横に玄関が位置したものである。玄関の間の奥には、台所と浴室の設備部分がもうけられたり、あるいは場合によって、女中室がここにとられることもある。便所と縁については、座敷直入りの基本型と同じ関係にある。

この基本型は、農家住宅の田の字型平面の発展と考えられ、田の字型の土間部が喪失し、土間部に玄関と台所等の設備が配置されたものと考えられる。この場合の次の間は、玄関からのアクセスがあるために機能上不安定性をもつが、続き間の格式性は保持されている。

### 2) 次の間入りの発展過程

次の間入りの発展過程も、北入り系列と同様に、設備の集中化とタテ中廊下の発生→ヨコ中廊下の発生、という段階を踏む。図7は、設備部分が妻側へ集中し、その備え部分と居住部分の間にタテ中廊下を通った事例であるが、このタテ中廊下の貫通によって、台所と茶の間は分断されるという問題を生じる。そこで、図8の事例に見られるように茶の間は台所との連続性を高めるために、妻側の台所の南へと移動する。これは、茶の間が台所との連続性を保ちながら、南面に独立した居住性のよい畳室となることに繋がる。またそれに伴い、便所浴室の設備は北面中央へ動き、それらを連絡する中廊下が通る。

以上のように、次の間入り系列は、南面の続き間を接客空間として残しながら、その一方で、家族の生活空間を充実させながら発展していった平面型である。こうした発展はさらに、

続き間が廊下によって区分され、家族生活空間と明快に分けられた接客専用空間となった。この発展は、座敷直入り系列が客のアクセスの変化によって、座敷北側の部屋（主寝室として利用）を転用続き間として発展したのに対して、著しく異なった平面を構成することになった。

南入り住宅の2系列は、いずれも北入り系列と同じ発展段階をたどる。しかし、その平面構成の原理は、玄関がアクセス型によって大きく異なり、座敷直入り系列は、アクセスが座敷へ直接入ることから、専用の客室が座敷だけとなり、続き間利用の可能性を内在させながらも、独自の平面をなした。次の間入り系列は、続き間座敷を接客空間として、確立させていく方向へと発展していった。

この2つの発展した平面型は今日の都市住宅にも見出し、

